

障害児の療育と家族援助

淡路こども園の実践を通して

社会福祉法人 水仙福祉会
淡路こども園 生活発達療育研究部
岩崎 隆彦、松村 昌子
堀 茂、角 美智子

1. はじめに

2. 淡路こども園の母子療育

- 〔1〕母子療育を始めるに至ったいきさつ
- 〔2〕母子療育を始めると
- 〔3〕家族援助の必要性
- 〔4〕療育の基本方針

3. 母親、家族の抱える問題とそれに対する援助

- 〔1〕母親がひとりで悩む
- 〔2〕母親自身が問題を抱えている
- 〔3〕父母の協力関係が取りにくい
- 〔4〕きょうだい関係が難しい
 - 弟妹との関係
 - 兄姉との関係

4. 子どもの難しく見える行動と家族との関係

5. 事例〈こだわりの強い自閉的な子どもの療育と、その家族に対する援助〉

6. おわりに

(注) 発達につまづきのある子どもについて、現在のところ、適切な表現が見つからないので、本稿では、心身の障害の内容や程度にかかわらず、「障害児」という表現を用いた。

1. はじめに

障害児者の現状を見ると、学校教育を終えた後、仕事を持って自立している人は非常に少なく、多くの人是在宅で通所施設や作業所に通っている。その人たちの生活の基盤は家庭であるが、家族関係はどうであろうか。家族の一員としてあたり前の生活が送れているだろうか。

本人の精神状態、周りの人たちとの関係のあり方、家族との交わりなどを見てみると、必ずしもそうなっているとは言えない状況がある。それは、同じ家族でも、兄弟同士のトラブルが絶えなかったり、互いに無関係に生活していたりする場合が多い。また、本人が強いこだわり、情緒不安、対人恐怖などの問題を持っていると、家族も積極的なかかわりを避けるので、家族の中でさえ孤立していたり、近所や周りの人からもなかなか理解されず偏見を持って見られ、閉鎖的な生活を送っている場合もある⁽¹⁾。

どの親も、この人たちの小さい時期、「子どものために」、「みんなと一緒に」と、保育所、幼稚園、学校に通わせてきた。それぞれの時期にかかわった保育者、教師、専門家もそれなりにできるだけのことをしてきたに違いない。しかし、それにもかかわらず、学校教育を終えて、周りの人や家族との人間関係が難しくなっているという現実をどう考えればよいのだろうか。「もともと重度だった」とか、「だから障害者なんだ」と言ってよいのだろうか。成人になった障害者を持つ親たちは、共通して「こんなはずではなかった」、「小さい時には言葉も出ていたし、こんなこともできた」と言う。小さい時に軽い障害だと思っていた人が、言葉を話さない、人を避ける、強いこだわりを持つ、自傷行為があるなど非常に生活が難しい重い障害者になっている場合が多いことは、周知の事実である。なぜそうなるのだろうか。

こうした状況を見ると、これまでの乳幼児期から成人に至るまでの過程で、何か欠けているもの、不十分なものがあると考えざるをえない。

私たちの今までの取り組みから、次のような要因が関係していると思われる。それは、第1に、発達の基盤である人との信頼関係の形成が不十分であること、第2に、自分の意思や気持ちをうまく伝えられない本人を、周りが理解する関係が作られていないこと、第3に、子どもを家族から離して治療、教育が行なわれ、家族を支えるための援助が欠如していることである。しかも、それらが小さい頃から一貫して提供できていないことに大きな問題があると思われる。

しかし、近年、就学前の幼児については、従来の考え方は少しずつ見直されつつある。即ち、障害を持つ子どものみを療育の対象とするのではなく、育児をする母親に対して働きかける母子通園が普及してきた。統計⁽²⁾によれば、昭和54年度には、精神薄弱児通園施設のわずか3%が園全体で母子通園を採用していたに過ぎないが、12年後の平成2年度では、77.6%が何らかの形で母子通園を取り入れている。目的としては、「母親に対する指導援助の一環として」、「園と家庭の一貫した療育による効果」、「親同士の交流」、「母子分離不安の除去」、「良好な母子関係の育成」などが挙げられている。内容は、「療育場面に参加」、「訓練、指導方法等の学習会を持つ」、「カウンセリングの時間を持つ」など、様々の試みがなされている。

こうしたことに見られるように、母子通園は増えてきているが、単なる母子に対する援

助だけで、はたして障害児を抱える家族の援助になるのだろうか。否、私たちはそれだけでは不十分だと考える。

当園は、社会福祉法人水仙福社会が運営している精神薄弱児通園施設であるが、昭和53年の開所当初から、独自の母子療育を実施してきた。同時に、地域療育事業の一環として、卒園した学童児のアフターケアを行ない、障害児が大きくなっていく過程で本人や家族が直面する問題について相談、援助してきた。これらの実践を通して、母親のみならず家族に対する働きかけが、障害児の成長にとって非常に大きな意義のあることがわかってきた。したがって、障害児の療育は、「障害児を持つ家庭を支援する」という、より広い視点に立って考えてみるべきだと思われる。

本稿では、障害児を持つ家族の抱える問題を明らかにしながら、当園で行なってきた援助、及びその成果について、事例を含めて報告することを通して、障害児の理解や家族援助のあり方について検討したい。